

特別展 山脇洋二 金工の世界

会期 昭和59年 8月28日(火) — 10月21日(日)

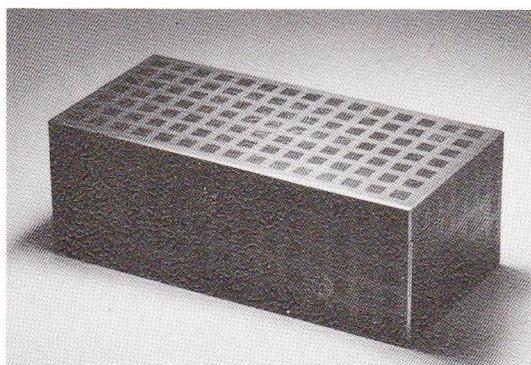
第一会場(地下1階陳列室)

第二会場(2階特別陳列室)

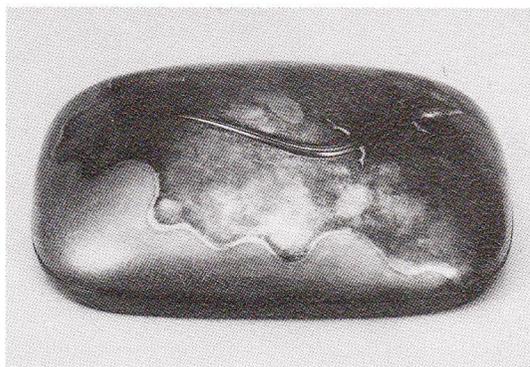
渋谷区立松濤美術館



犬置物 昭和5年(1930)
東京芸術大学芸術資料館蔵



舞御堂小箱 昭和21年(1946)
東京芸術大学芸術資料館蔵



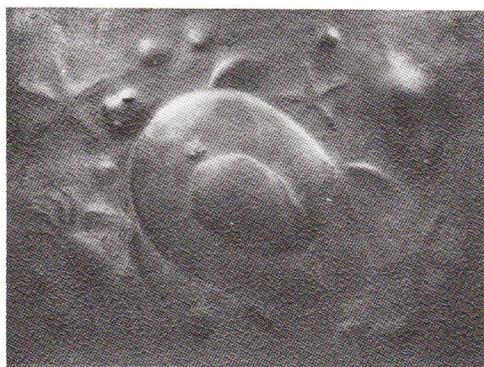
蜥蜴文硯箱 昭和22年(1947)
京都国立近代美術館蔵



金彩鳥置物 昭和31年(1956)



金彩馬額 昭和32年(1957)



金彩游砂額 昭和36年(1961)
東京芸術大学芸術資料館蔵

彫金は歴史も長く、伝統的意識の強い土壌の中で育つ工芸である。

山脇洋二は、大正14年（1925）東京美術学校彫金科に入学、教官には清水亀蔵、海野清、一年下に内藤四郎、後藤学一がいた。在学中、金工芸界の革新を標榜する北原千鹿主宰の『工人社』の創立に参加、昭和5年（1930）美術学校を卒業、卒業制作の「犬置物」は斬新な感覚の横溢しているもので、形姿を簡略化し、犬の特徴を強調している。卒業後、東京帝室博物館に入り、古典彫金の模作を行う。国宝「伽陵頻伽文華鬘」（中尊寺蔵）国宝「狩獵文銀小壺」（東大寺蔵）などの模作である。昭和6年（1931）第13回帝展初選の「照明器」には、当時流行した表現派の影響がうかがわれる。

その後も意表をつく発想で新感覚の力作を帝展、新文展に発表、つぎつぎと受賞することとなる。

戦後、昭和21年（1946）第2回日展に出品した「舞御堂小箱」は長方形の小箱全体を隴銀の黒と素銅の赤によって仏堂の格子をあらわし、その上に舞う飛天を線刻した美しい箱である。

つづく第3回日展の「蜥蜴文硯箱」は、鋳出による曲線に包まれた銀製の硯箱で、その上に一匹の大きな蜥蜴が叢から飛び出した瞬間をあらわしている。非常に斬新なもので、蜥蜴の背の黒い象嵌した線が印象的であり、蓋の合口に塗った朱塗が効果的であった。

昭和31年（1956）第12回日展出品の「金彩鳥置物」は、完全に省略化した鳥の姿である。金属板を鋳出して造形し、鋳目を柔らかく残し、全体に金彩を施こして金鳥に仕上げ、金属の冷めたさをなくしている。それは中国銅器にみる重厚さとは反対に、全体が羽毛のような柔らかさを持ち、みる人に暖い感じをあたえる。山脇洋二の創造した鳥といえるであろう。

昭和32年（1957）は作風が大きく転換した時期である。この年を境に立体的造型から平面的な浮彫造型へと大きく移行する。この年第13回日展出品の「金彩馬額」は、一枚の大きな銅板を荒々しく鋳出して奔馬を浮彫風に表現し、表面全体に金銷しをかけて金彩としたものである。これ以後この手法の作品を続けて発表する。

昭和36年（1961）第4回新日展出品の「金彩游砂額」は日本芸術院賞を受賞する。昭和32年から晩年の昭和57年まで25年間、日展に金彩額を出品しつづけた。

銅板を裏表からトントンと打ってゆくと、延展されて起伏ができる。微妙な凸凹が波をうつように繰返し、形象を浮き出させる。さらに最小限の線刻が細部をきめる。画面一杯に何千何万と打込まれた鋳目、鑿目の一点一点は単なる鋳跡にすぎないが、集積すると、金属面に柔らかい表情をつくる。金属を彫り出しもしない、曲げたりもしない。

その上にさらに金銷しをかけて純金の色と質感を加え、柔らかい調子に仕上げると、金と彫りとがぴったり一致する。

この手法で、馬・牛・蝶・亀・蟹といった動物の世界から、誕・生といった生喜の世界、^{きんし}金鷄・^{やたがらす}八咫鳥・白兔といった神話の世界、阿修羅・持国天・曼陀羅といった仏教の世界、踊る・奏でるといった古代埴輪の世界というように銅板の中に想を広げていった。

山脇洋二の作品の一作、一作はそれぞれ時代によって表情を変えるが、一貫して流れているものは新しい時代の金工を生み出そうとする進歩的な工芸観であった。

昭和初期、工人社の行った革新的な工芸運動は、世間から久しく忘れ去られていたが、最近、再び光が当てられつつある。この時期に創立者の一人山脇洋二の軌跡を見ることは、また大いに意義深いことであると思われる。

山脇洋二略年譜

明治40年(1907)	大阪に生る	昭和41年(1966)	文化財保護審議会専門委員
昭和5年(1930)	東京美術学校(現東京芸術大学)卒業		第9回新日展審査員
8~14年(1933~1939)	東京帝室博物館に於いて 古美術品模造	46年(1971)	日展理事
14年(1939)	東京美術学校講師(19年同校助教授)	47年(1972)	改組第4回日展審査員
22年(1947)	第3回日展審査員	49年(1974)	東京芸術大学定年退官 同大学名誉教授
24年(1949)	法隆寺五重塔秘宝調査並に複製	50年(1975)	社団法人日本新工芸家連盟代表委員 日本創作七宝協会会長
25~27年(1950~1952)	正倉院御物金工品調査	53年(1978)	正四位勲三等旭日中綬賞叙勲
27年(1952)	第8回日展審査員	56年(1981)	山梨県立宝石美術専門学校校長
30年(1955)	東京芸術大学教授	57年(1982)	12月11日没
31年(1956)	第12回日展審査員	58年(1983)	従三位に追叙
35年(1960)	第3回新日展審査員		

特別陳列 渋谷区在住作家の作品 (2階サロンミュージーゼ)

飯田満佐子	『樹』 昭和52年(1977) F10号 日本画
伊藤隆康	『同時に存在する半球体』 昭和43年(1968) 高さ60cm アルミニウム
大久保泰	『早朝の運河(ベニス)』 昭和48年(1973) F50号 油彩
大森啓助	『さかな』 昭和41年(1966) F12号 油彩
ガストン・プチ	『機械の女』 昭和44年(1969) 67×45cm 木版
児玉幸雄	『ローマの青物市』 昭和58年(1983) F30号 油彩
五味秀夫	『港湾風景』 昭和56年(1981) F30号 油彩
近岡善次郎	『そのえ地蔵(東北民話による)』 昭和50年(1975) F50号 油彩
辻 朗	『雪のあと』 昭和52年(1977) F50号 油彩
西嶋俊親	『水温む』 昭和58年(1983) F15号 油彩
堀内正和	『水平の円筒』 昭和24年(1949) 高さ27cm 鉄
吉本直貴	『粒子と形態』 昭和57年(1982) 高さ137cm 砂鉄、アクリル樹脂

■講演会■

● 9月8日(土) 午後2:00～

「山脇洋二 金工の世界」

東京芸術大学教授 中野 政樹

● 9月29日(土) 午後2:00～

座談会「山脇洋二を語る」

東京芸術大学名誉教授 小池岩太郎

東京芸術大学教授 平松 保城

ジュウリーデザイナー 山田 礼子

■美術相談■

美術作家を招いて、実際に皆さんの制作作品を見ながら、指導・相談を行うほか、美術史・美術図書の相談に応じます。

●相談日・相談美術作家

9月23日(日) 午後1:00～4:00

洋画家 磯村敏之 / 日本画家 滝沢具幸

10月20日(土) 午後1:00～4:00

洋画家 宮田翁輔 / 日本画家 荒井朝吉

●申込方法

事前に電話で相談内容をお申し込みください。

■美術映画会■

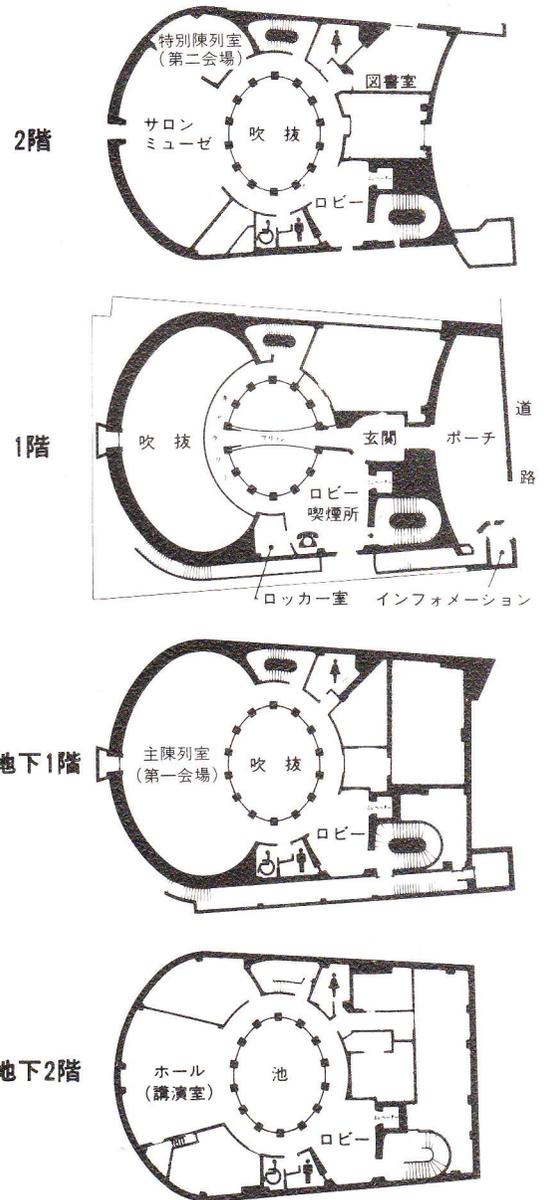
○ 9月2日(日) 午後2:00～3:00

「伝統工芸の明日を考える」「日本の金工」「七宝」

○ 10月7日(日) 午後2:00～3:00

「茶の湯釜・長野埴志」「梵鐘・香取正彦」

松濤美術館・平面図



●会 期 昭和59年 8月28日(火)～10月21日(日)

●休 館 日 第2日曜日及び他の週の月曜日・祝日の翌日
 9月 / 3日(月)・9日(日)・17日(月)・18日(火)・24日(月)・25日(火)
 10月 / 1日(月)・8日(月)・11日(木)・14日(日)

●開館時間 午前9時～午後5時(ただし、入館は4時30分)

●入館料

	個人	団体(20人以上)
一般	200円	160円
小・中学生	100円	80円

